

清末小説から

111

2013.10.1

いくたびかの阿英目録3 樽本照雄 1

《狗之日記》の原作..... 渡辺浩司 5

『吟辺燕語』批判の謎..... 沢本香子15

清末小説から4、15、25

『清末民初小説目録 第5』が無料公開中です。清末小説研究会 <http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto> から複写することができます。中国のウェブサイトもデータを提供しているらしい。無許可罫

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

いくたびかの阿英目録3

樽本照雄

周越然目録

周越然「稀見小説五十種」、「稀見訳本小説」(『版本与書籍』上海・知行出版社1945.8)がある。複写の表紙と扉をご覧ください。

1899年から1915年までに刊行された創作を主とした50件と翻訳の40件(重複を含む)の計90件を収録する。1911年をいれ

てそれ以前の小説は、79件だ。収録件数だけを見れば多いとはいえない。しかし、阿英目録と重複しない作品が、39件ある。しかも、該書の刊年からいっても、創作と翻訳に2分する方法は阿英よりも先なのだ。阿英が周越然目録についていわない理由は、知らない。

さきほど阿英目録が1作品1行記述を採用しているとのべた。それと同じ方法を、周越然目録は阿英よりも以前に実践している。

作品名、回数、著者(翻訳ならば原著者、訳者)、刊年、出版社などの項目を記す。阿英目録のばあいは、出版社のかわりに掲載雑誌名であったりする。同じ作品を例にとって写真で示す。それぞれ創作(周創、阿創)と翻訳(周翻、阿翻)だ。

1作品1行で基本事項を表記する。両者がよく似ているのは、当然だろう。

小さなことをつけ加えたい。

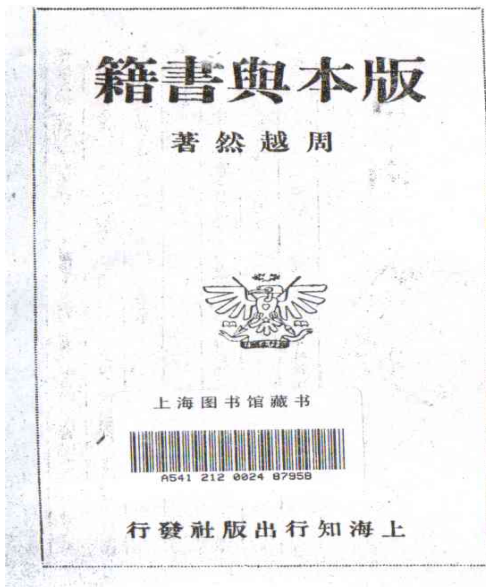
周越然『版本与書籍』表紙と扉

周創

阿創

周翻

阿翻



(一) 刺客談六回，新中國之廢物著，南營蠻子評，光緒丙午年滙文新書社印行。

刺客談 新中國之廢物著。光緒丙午（一九〇六）滙文新書社刊。

(二) 紅淚影四卷二十四回，巴達克禮著，息影廬主譯，清宣統元年廣智書局發行。

紅淚影 英巴達克禮著。息影廬主譯。宣統元年（一九〇九）廣智書局刊。二十四回。四冊。

周越然と阿英の記述例

周越然は、阿英と同じく実物を見て目録を編集したと考えて間違いないだろう。ところが、原本に拠っているはずなのに両者ともに訳者名を間違う例がでてきた。奇妙な偶然としかいいようがない。

キリスト教関係者が漢訳した『釦子記』(未見)である。周越然と阿英は、ふたりともに「狄丁(また狄丁氏)」と書いている。

ところが、宋莉華はそれが間違いだと指摘する。「狄文氏訳」だというのだ。それにより、周越然をふくんで阿英目録以降のすべてが一律に誤記していることが明らかになった。これには、すこし驚く*16。誤植のたぐいではなく、そんなこともあるのだな。

宋莉華は、上の誤記例を示すために、阿英目録、陳鳴樹主編『二十世紀中国文学大典(1897-1929)』(上海教育出版社1994.12)と一緒に樽目録第3版を引き合いに出した(19頁)。目録3種を同列にあつがっているように見える。これは基本的には不適切というべきだ。

阿英は実物を手元において目録を作成した。樽目録は、全部が実物というわけにはいかない。私は目録の説明に「第2次資料にもとづいて記述している部分のほうが多い」と正直に書いている。すると、なにを勘違いするのか、人によっては、実物をひとつも見ずに編集したと思うらしい。書いてあることを自分に都合のよいように読むのだ。樽目録を細かく見れば、いくつかは実物を見ているとわかるはず。そう考えたのは、私の誤り。考えが甘かった。もうひとついうならば、

私なりの工夫をした箇所がある。だが、利用者はそれを見逃す。典拠資料を明記している点だ。参考資料をまとめて掲げたのではない。ひとつひとつの作品に典拠を注記している。追跡調査することが可能だ。従来の小説目録とは性格が異なる。まったくの別物になっているといていい。

阿英と周越然でちがう箇所があることに気づく。見てのとおり、阿英は、記述するときに傍線を使用している。

阿英が使用した記号

記述は簡素化しながら、それぞれの作品をわかりやすく区別できるように工夫した。

基本のひとつは傍線だ。阿英は、2種類を使い分ける。

直線は、氏名、地名、年号、出版社名などに引く。作品名、雑誌新聞名には、波線をほどこす。ただし、見出しの作品名は裸のまま。わかっているのだから、波線は必要ではない*17。

阿英は、傍線のほかに、ある特定の漢字を使い分ける。

基本は2字である。ひとつは「本」であり、もうひとつは「刊」だ。結論を先にいっておく。「本」は、新聞雑誌掲載を示す。「刊」は単行本を指す。

「本」と「刊」を基本的に堅持しつつ、実際にはそれ以外の表記も見受けられる。

創作の部では、「印」(阿英75頁、以下同じ)を「本」の意味に使う。また、「刊印」(80、131頁)「版」(80、107、125頁)「印本」(92頁)「発行」(103頁)などは、

「刊」と同じこと。

しかし、これらは、例外的なものと考えてよい。傍線とあわせて判断できる範囲内だ。「自印本」(93、108頁)がある。いうまでもなく、自分で印刷したことを表わす。出版社とは関係のない私家版だ。

翻訳の部では「訳印」とある。翻訳して同時に刊行した。ならば「訳刊」と記述すれば目録としての統一を保つことができるだろう。事実、「訳刊」は、118頁1行、133頁12行、135頁13行、137頁2行、162頁8行にある。だが、なぜかしら「訳印」の方が多数を占める。そうなると、「印」は「刊」と理解しなければならない。創作の部とは意味が異なる。「印」を「刊」の意味に使用した例が123、124、128、131、132、135、137、161、165頁にある。「刊本」(139頁)、「印本」(165、170頁)も「刊」で置き換えることが可能だ。

例外部分が多い、という印象を持たれたかと思う。だが、基本はやはり「本」と「刊」である。

例を示したほうがわかりやすい。 罍

【注】

16) 樽本「マティーアと『釦子記』」『清末小説から』第105号2012.4.1、1-13頁。要約：漢訳『釦子記』の訳者は誰か。従来は狄丁氏だといわれてきた。阿英、周越然らの目録、あるいは樽目録第3版にもそう掲載してある。しかし、事実はそのようではない、という。宋莉華は、狄丁氏ではなく狄文氏であると新しく指摘した(宋莉華『伝教士漢文小説研究』上海世紀出版股份公司、上海古籍出版社2010.8 海外漢文小説研究叢書)。従来の目録は、ふたつを混同している

と断定する。『釦子記』を見ることができないのなら簡単だ。だが、実物を見ることができない。それを確認するためには何をどう調べたらいいのか。マティーア兄弟の再婚相手について調べるようになった。その結果、宋莉華の指摘は正しいとしても、ふたつを混同していたのは宋莉華自身でもあったという皮肉なことになってしまった。

17) 傍線を使った実例は、阿英『晚清小説史』にも見られる。さらに以前の使用例について、中村忠行は次のようにいう。「最も普通に行はれたのは、人名には一本の、地名には二本の傍線(専名号)を引いて識別する方法で、既に Rev. Wm. Burns 訳『天路歷程』(Bunyan: *The Pilgrim's Progress.*) に用いられられてゐる」。中村「清末探偵小説史稿 翻訳を中心として(1)」『清末小説研究』第2号1978.10.31、33頁。また、実藤恵秀によるつぎの指摘がある。「また地名の傍に == 人名の傍に の線を入れる事も、日本漢籍の翻刻から輸入されたものの様である。これが民国になつて文学革命の時、新標点符号に採用されて今日に到つてゐる」実藤「邦書華訳の概観(華訳邦書目録)」『東亜解放』第2巻第2号1940.2.1、162頁

『清末小説から』第110号 2013.7.1

いくたびかの阿英目録2樽本照雄
L. J. Beeston の中国語訳渡辺浩司
江貴恩的《時新小説》和《鬼怨》 傅蘭雅
“時新小説” 征文参賽作者考(六) ...姚 達兌

《狗之日記》の原作

渡辺浩司

1

《小説時報》第二十四期(有正書局,1914年12月15日)に、《狗之日記》なる短篇作品が掲載された。書名下には“(天笑)”、“(毅漢)”とあるだけで、創作に見える。『清末民初小説目録 第5版』(樽本照雄編,2013年4月15日)も創作と見なしている(G0362)。しかし、この作品は実は翻訳なのである。このたび、原作が判明したので本稿で報告する。

原作は『The Dog Who Wasn't What He Thought He Was』、原作者は Walter Emanuel、掲載誌は『The Strand Magazine』Vol. 45-No. 270(George Newnes, 1913年6月)。後に単行本にもなり、カラーの絵本として、Raphael Tuck and Sons, Ltd.から出版されている*1。

原作者 Walter Lewis Emanuel は、1869年生、1915年没、英国の作家で、ユーモア作品や Punch 誌への投稿で知られていた。

訳者について、“天笑”は包公毅、原籍は江蘇呉県、1876年生、1973年没、創

作・翻訳作品を数多く発表し、雑誌編集も行なっていた。“毅漢”は張毅漢、原籍は広東新会、1895年生、1950年没、13歳から小説を発表し始め、共作も含めて約130の作品を残した。その大部分は翻訳小説という。本誌前号の拙稿「L. J. Beeston の中国語訳」で採り上げた《懺悔》や以前に「Bruno Lessing の中国語訳」で採り上げた《薔薇花》、《留聲機》も両者の共訳であった。

2

人の言葉を解する飼犬の一人称で語られる『The Dog Who Wasn't What He Thought He Was』のあらすじを紹介する。

月曜日

今日は母親のもとを離れるという特別な日だった。私は Pretzman 家に住むことになった。一家は、頼りなさそうな夫と賢明な妻と1歳半ほどの丸々とした赤ん坊 Chicky だった。私のようなすぐれた者がこの赤ん坊とうまくやっているとわからない。私がいるのだから、夫妻に赤ん坊は必要ないと思う。一家はフラットに住んでおり、夫の仕事はわからないが、なかなか裕福である。私は立派な犬小屋をもらった。地主になったようであれしかった。たぶんここではうまくやっていたらいいだろう。独立し、あの口うるさい母から自由になったのは大きな出来事である。田舎から出てきて疲れたので、小屋に入るとすぐ眠ってしまった。

火曜日

今日はすばらしいことばかりだったと

she realized at once that I was seriously ill. Indeed, her concern was quite pretty to behold. She consulted her husband and persuaded him to send for the vet. "And we mustn't forget to ask him, when he is here, what sort of dog it is," said my master. "He'll know." Of course he would, for vets. are experts. The thought that my master and mistress would soon know the truth about me had a wonderful effect on me, and I began to feel better at once. I longed to see the effect of the revelation. One result seemed pretty certain to me. I should be transferred to the bassinet, and that rotten baby would be put in my kennel.

It was a long time before the vet. came. Would that he had never come!

They brought him to my kennel. The brute dragged me out with scant ceremony, and held me up by the loose skin at the back of my neck. "Nothing much the matter with him," he said, "except that he's been a bit careless in his diet. All puppies are greedy little devils." Polite, I thought, saying this before me. "I'll send him some physic," he said. "Oh, and doctor," said my mistress, "what sort of dog is he? Will he be a big

dog?" Now for the sensational disclosure, I thought, and I wagged my tail violently. The vet. looked at me in his arrogant way. Then he spoke with deliberation. "Well, I daresay he's a very nice little fellow," he said, "and I expect you are fond of him; but he's the most terrible little mongrel there ever was, and he's full size now. His value, I should say, is exactly twopence-halfpenny. Halloa!" he added, a second later. "I've never known a dog to do that before. I believe he has swooned."

They brought me round with some difficulty, and I am beginning to feel better now, but I think I would rather die. For I shall never, never be able to face my friends again. Oh, the difference—the cruel difference—between yesterday and to-day! What does life hold for me now? Nothing—absolutely nothing. I am a dog without a future. Why live? Indeed, a few minutes ago I had made up my mind to starve myself to death, and I would have done so, only I found myself getting so beastly hungry. I must think things out. I wish I could see my mother. Oh, it's a difficult world for little dogs!



"OH, IT'S A DIFFICULT WORLD FOR LITTLE DOGS!"

は言えない。私の犬小屋はよく調べると、安物だとわかった。ドアが無く、外出時、鍵をかけられないのである。そして、私の主人は私に Gibus というおかしな名を付けた。理由は、私の顔がたたんだオペラハットに似ているからだそうである。私はもっとおかしな名を知っている、それは Chicky である。このことにより私があの赤ん坊の下につくよう求められていることははっきりしたが、私はそうする気は無い。更に、一家は私の犬種が何であるかを知らないのである。夫妻は朝食時にその話をしていた。彼らも知らないのだが、私も知らないのである。母は私に教えずに私を外に出した。私は11匹の中の1匹で、私たちは皆異なっていた。母はとても多才だったのである。

今天降了一天，疲乏得不堪了。一到了屋子裏，早納頭便睡。咧。星期二，今天我的心中好像覺着有點兒不快樂。這是為何呢？因為我所住的那屋子，給我細細的看出來，是用廉價草草建築的。這屋子無門，我外出時，不能把他關上。故此常常擔心着有忠厚的東西到我屋子裏面去。這非但是喪失我的利權，而且怕他破壞我的產業。咧我的主人，又給我起了一個名兒，叫及白士。他說他出來的無論他是那一種，我叔叔約翰能把他透與我們這人，不是很可愛嗎？哈哈他們竟然放了我來，到這社會想是何種，然而我自己也自知呢？我的母親却并未嘗告訴我，我是何種，便遽然放了我來，到這社會想



見了，我的臉兒就要想起已前戲劇中一個丑角的名兒，故此就給我起了這名兒。這潑烈帶門一家人，都不知我為何種狗。早餐的時候，我聽潑烈帶門夫人說道：「我不知他是何種潑烈帶門也。」道我也不知將來，我必把他細細的驗

朝食後、女主人が散歩に連れて行ってくれた。初めてだった。町は速い乗り物がいっぱいひどい所だった。女主人は私をしっかりと守ってくれてうれしかった。私の価値を知っているのである。バス内では、女主人のマフにくるまれて膝に抱かれている私を見た、近眼の老婦が「大きな身体なのに頭はなんと小さいでしょう！」等と言って驚いていた。女主人と私は公園に着いた。犬のためにあるようなすばらしい所で、自由に駆け回ることができた。女主人は訓練不足で、時々私に追いつけないことがあった。大型犬が話しかけてきて、一緒に追いかけてをしたりしたので、小型犬たちは嫉妬し、私に「誰がお前の顔に座ったんだ？」等と悪口を並べた。私は軽蔑し無視した。

THE DOG WHO WASN'T WHAT HE THOUGHT HE WAS

. BY .

Walter Emanuel

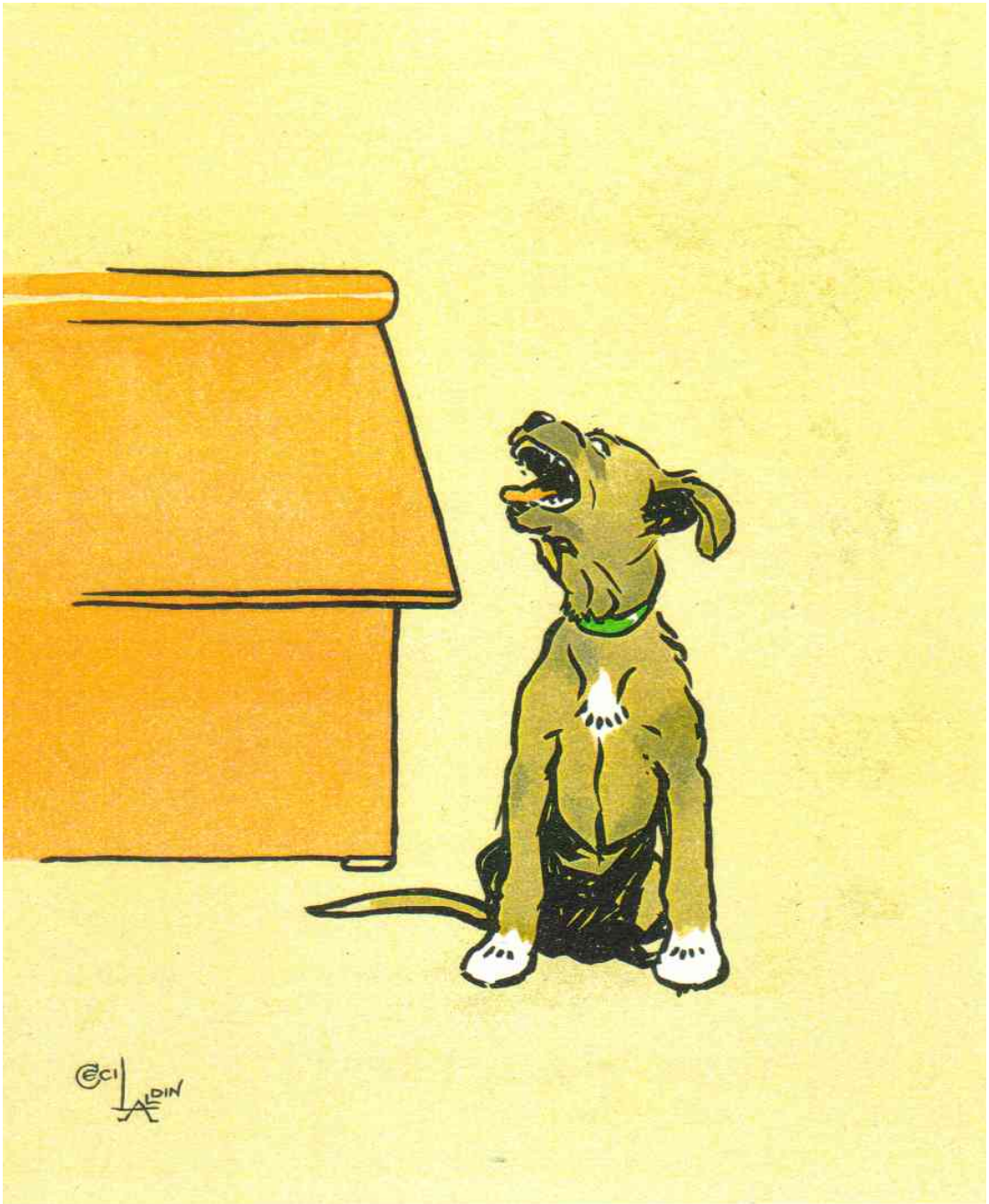


Cecil Aldin

Illustrated by Cecil Aldin

すると、中の2匹がかみついてきたので、私は女主人のもとへ駆け戻った。彼女は私を抱き上げ、日傘で彼らをたたいた。彼らはキャンキャン鳴きながら逃げてい

った。大型犬が私の犬種を尋ねたので、私は「知らない」等と答えた。更に「純血種か」と尋ねたので、「もちろん」と答えた。「口を開けて Ah! と言ってみて」



I GAVE A HOWL

等と言ったので、私がそうすると、彼は「君は純血種ではない、純血種は口の中の上部分が黒い」等と言った。私が「どこでそれは手に入るのか」と尋ねると、彼

は「母親からしか得られない」と答えた。私は母の世話になりたくなかったので困ってしまった。散歩からの帰り、私は疲れて座り込んだ。女主人は私を抱き上げ

ようとしたが、私の足が汚れていたので怒ってしまった。女性はなんと無分別なのだと思った、というのも私をこんなに遠くまで連れて来て疲れさせたのは彼女だからである。

午後、書齋にいて石炭の箱を見た時、母に面倒をかけずに純血種になるすばらしい考えがひらめいた。私は石炭を口に入れた。食を進めていると、主人が現れ、「こんなことをしたら、お仕置きするぞ」等と言った。「石炭は食べ物ではない」とも言ったが、それは嘘である。私は昨晩、石炭消費者組合の話を夫妻がしていたのを聞いたばかりである。ただ私は感情を抑制できない人とは議論したくないので、食べるのを止めた。彼が純血種でない犬を飼いたいならばそれでいい。彼は、私が散歩の帰りに歩かなくなったことにも言及し、もし私が歩かないなら、足に車輪を接着して玩具のように引っ張られるようにする等とも言った。愚か者め!

夜中に目が覚め、寂しく感じ、遠吠えをした。続けていると、Pretyman氏が現れ、静かにするよう言った。私は鳴き続けた。彼はなだめたり、たたくふりをしたが、私は鳴き続けた。彼が妻に「止められない」と言うと、妻は「砂糖をあげてみたら」と提案した。彼は角砂糖をくれ、静かにするよう言った。私が静かにすることが彼にとって重要であることを知り、かつ私は砂糖が大好きなので、まだ鳴き続けた。彼が3回目の角砂糖をくれた時、私は満足し、いい子になると決めた。いい取引だった。

水曜日

まず、私は女主人の部屋に行き、クッションを2つボロボロにした。羽毛が散らばる様子は華やかだった。それから、主人の書齋を訪れ、お気に入りのパイプを壊し、多くの手紙を紙片にした。紙片が舞い落ちる光景は壮観だった。次に私は赤ん坊のことを考えた。どうして彼がChicky お坊ちゃまで、私がただのGibusなのだ? 偶然、子供部屋が開いており、彼は1人だった。この哀れな四つ足は、おもちゃを手に、何かつぶやきながら床を這っていた。一言の挨拶も無く、無作法に私をじっと見て、私がおかしいものであるかのように笑ったので、私は彼に近づき、おもちゃを奪い、それをかんでやった。彼は大声を上げた。子守りと母がとんで来て、彼をあやした。一方で、私は、クッションやパイプや手紙のことも合わせて、Pretyman氏から鞭で打たれた。私は傷つき、犬小屋に閉じこもり、なんといやな生活だろうと思い、自殺まで頭によぎった。母に会いたいと思った。

昼食後、気分が少しよくなった。すばらしいことに、私は自分が何であるかがわかった。私はブラッドハウンドなのだ。書齋で横になり、壁の絵に目をやった時、衝撃を受けた。『The Bloodhound - Landseerの模写』という題で、私が成長した姿だった。私は興奮し、女主人の寝室に行き、鏡に自分を映した。間違いなくブラッドハウンドだった。未来が開けたようで、すべてに寛容になった。あの赤ん坊ももう嫌うことは無い。なぜなら彼はブラッドハウンドになれないからだ。かわいそうに。主人らが現れた。一家は気付かず

にブラッドハウンドを育てているのだと伝えようとした。私は絵に注目して、尻尾を振り続けたが、主人は「見ろよ、Landseerの複製をじっと見てるぞ、『Dignity and Impudence』みたいだな」等と言うだけだった。見る目の無い奴らだ。私は何も言わずに決心した：私が成長し、まだPretyman氏が私をぶとうとするなら、私は彼を口でつかんで振り回してやる；Gibusと呼んでも返事はしない。今夜も吠えて砂糖をもらおうと考えていたが、こんな事情なので我慢した。実際は、とてもうれしくて使用人に起こされるまで眠っていた。

木曜日

元気なままのすばらしい日だ。女主人が朝食後、また公園へ散歩に連れて行くと言っていた。広々とした所へ行けるのはいいことだ。私のことはまだ外へは漏れていないようだった。家から91メートルも行かない所で、私の半分くらいの小猫が階段で日光浴しているのを見かけた。私は面白半分で、彼女に跳びかかるふりをした。驚いてひっくり返るか、悲鳴を上げるかと思っていたが、この小娘は背中を曲げた威嚇の姿勢でうなり声を上げた。私は少し怒って「貴女が侮辱を与えたのが誰なのか、わかる日が来るだろう」等と言った。ただそんなに気にしていなかった。公園に入り、大型犬の友達と会った。私が自らの大ニュースを話した時、彼らは微笑んでいた。今では私は彼らと同等だと思い、更に元気になった。身の軽そうな大型犬がやって来たので、私が犬種を聞くと、「ポプテイルド

シーブドッグ(bob-tailed sheep-dog)だ」等と答えた。私は「確かに尻尾の付け根に飾りもつけていないね」等と冗談を言った。表情を変えない彼から犬種を聞かれたので、「ブラッドハウンドだ」と答えた所、この時になってようやく彼は、先の私の冗談に大笑いした。私の気持ちは高揚していたので、小型犬の悪口も全く気にならなかった。家への帰途、その日一番楽しいことがあった。私がそばを歩いていた男のかかとをクンクン嗅いでいると、男は女主人に「貴女のブラッドハウンド(blood'ound)が俺を追うのを止めてくれ」等と言った。女主人はこの言葉の重要性を認識していないようだったが、私にとってこの上ない喜びであった。とても元気が出ていたので、いつもなら激怒することでも我慢できた。私の留守中に、誰かが犬小屋の中を片付けてしまった。いい骨等の蓄えが失われた。これでは成長できないと思ったが黙っていた。

その日の残りは、書斎の絵の向かいにいた。時々絵を見つめた。絵と比較すると、人間とはなんと下品なのだろう。Pretyman氏は私の変化に気付いたが、「犬がいい子になったのは、昨日鞭で打ったからに違いない」等と言った。わからない奴だ。

金曜日

暗黒の金曜日だ。すべてが終わった。生きる望みも無い。午前には雨で散歩に行けなかった。家には私が入室を禁止されている部屋が1つあり、それは主人の更衣室だった。犬ならば周囲を十分に探索するまでは決して落ち着けない。その更

衣室のドアが開いていた。私は入った。私の好きな物の1つが靴である。靴を引き裂いて口に運ぶのが大好きである。室内の開いていた棚には30足のブーツや靴があり、私は跳びかかった。1足の茶色い靴に当たってしまった。毒が塗られていたのだろう。主人は毒を塗った靴を履きそうな人間だ。思い起こすと、独特な味がした。味見をするとすぐに腹部に激痛が走った。小屋まで這い戻ったが、腹痛は続いた。うなっていると、女主人が様子を見に来た。女性の勸で、彼女はすぐに私の具合が悪いのを見て取った。夫に相談し、獣医を呼ぶよう勧めた。彼女は「この犬の犬種も聞こう」等とも言った。私の犬種を知れば、夫妻の私への待遇は変わるであろう。私は気分がよくなり始めた。夫妻は私を赤ん坊のかごに移し、赤ん坊を犬小屋に移すだろう。獣医がやって来た。彼は私を無遠慮に引きずり出し、首根っこをつかんで持ち上げた。彼は「大したことはない、小犬は食いしん坊だから、普通の食べ物に少し気を付けて下さい、薬を出しておきます」等と言った。女主人は「この犬は何ですか? 大きくなりますか?」等と尋ねた。私は尻尾を振って回答に期待した。獣医は私を見て「この犬はとてもいい犬です、しかし小型の雑種なので、今で最大です、値打ちは2ペンス半の安ものです」等と言った。それから「こんな犬は見たことない、気絶してますよ」等と付け加えた。

彼らは苦勞して私を正気づかせた。今はよくなりつつあるが、死んだ方がましだったと思う。友達に会わせる顔が無い。

昨日と今日の落差は何だろう。私は未来の無い犬だ。3分前に、絶食して餓死しよう決心し、今、猛烈に空腹だ。私は諸事情について考えねばならない。母に会いたい。小型犬には困難な世界なのである。

犬の名の Gibus は、19世紀前半にオペラハット(折りたたみ式のシルクハット)を開発した、フランスの Antoine Gibus から来ている。Landseer は、Edwin Henry Landseer のことで、1802年生、1873年没の英国の動物画家。『Dignity and Impudence』は彼の1839年の作で、ブラッドハウンドとテリアが描かれている。

3

翻訳について述べる。原作の単行本が1914年刊だとすると、翻訳が拠ったのは雑誌なのか単行本なのかが問題となる。これについては、翻訳2頁の挿絵が雑誌の挿絵と一致する、雑誌と単行本との相違個所について、翻訳は雑誌に一致する(例: Chicky の推定年齢を、雑誌 - about a year and a half(629頁左)、単行本 - about three years(頁無)、翻訳 - 不過一歳半(1頁)、とする)、という2点から翻訳は雑誌に基づくと言える。以下の原作の引用はすべて雑誌からである。

他に訳されていた場合の原作探求の手掛りになると思うので、主な固有名詞の対照表を掲げる。

原作	中国語訳
Gibus	及白士

Pretyman	潑烈蒂門
Chicky	軒奇

書名について。原作「The Dog Who Wasn't What He Thought He Was」(自分が、自分が考えた自分ではなかった犬)を“狗之日記”(犬の日記)としている。原作は、内容を表しているとはいえ、少し凝った書名にしている。原作者には、その書名から犬を扱ったと思われる作品が他にもあり、それらと区別するために工夫した書名が必要だったのであろう。それに対して、訳者は単に内容を直接表す書名がいいと考えたのであろう。妥当な改訳だと思う。

内容については、細かな加筆・改訳が全体にしばしば見える。また、木曜の、ポプテイルド・シープドッグと話す場面や散歩からの帰宅後の場面等に大きな省略が見られる。

改訳部分を見る。犬の名に関する場面である。

Then my master has given me the absurd name of Gibus, because, he says, my face reminds him of his opera hat when it is shut up.(629頁右)

(そして我が主人は私に Gibus というおかしな名前を付けた、その理由とは、彼が言うには、私の顔を見ると自分のたたまれたオペラハットを思い出すからだそうである。)

我的主人又給我起了一個名兒。叫及

白士。他說他一見了我的臉兒。就要想起已前戲劇中一個丑角的名兒。故此就給我起了這名兒。(2頁,句点是原文のまま,以下同)

(また我が主人は私に及白士という名前を付けた。彼が言うには、私の顔を見るとすぐに昔の舞台の、ある道化役の名を思い出すそうである。それ故、私にこの名を付けたそうである。)

原作からは、犬の顔にしわが多いことが想像できるが、翻訳からは何もイメージできない。やはり説明を付けてでも原作通りに訳した方がいいと思うが、或いは、当時、まだ Gibus の情報が無かったのかも知れない。次に、原作のユーモア部分を如何に訳しているか見ておく。石炭を食べた犬が叱られた後の場面である。

Then he seemed ashamed of his cowardly threat, and said, “One does not eat coal, you know.” This was a lie, for I had heard his wife asking him only the night before for the address of the Coal Consumers' Association.(630頁右)

(その後、彼は自らの卑劣な脅迫を恥じたようだった、そして言った「石炭は食べ物じゃないことくらいわかるだろう。」これは嘘である、というのも、彼の妻が石炭消費者組合の住所を彼に尋ねていたのを、私は昨晚耳にしたばかりだったからである。)

“...這煤是燒的。不能吃的。”我主人的這句話。分明是誑我。他說煤不能吃。這不是誑話麼。我記得有一次煤業俱樂部來請他晚餐。這晚餐所吃的一定是煤無疑。他說煤不能吃。明明是欺我一隻狗了。(5頁,引用符は補った,以下同)

(「...この石炭は燃やすもので、食べられないよ。」我が主人のこの言葉は明白に私を騙すものだ。石炭は食べられないと言うが、それは嘘ではないか。私は覚えているが、石炭業クラブが彼を夕食に招いたことがあった。その夕食で食べたのはきつと石炭だったに違いない。その彼が石炭は食べられないと言うのは、一匹の犬たる私を明らかに欺いたものだ。)

原作は、Coal Consumers の意味を犬が誤解したことになっている。そのまま訳してもいいと思うのだが、翻訳は大きく改めている。また、この話は火曜のことで、犬が家に来て2日目である。故に、“我記得有一次...”はそもそも成立しないのである。外国のユーモアの翻訳は難しい。最後に、加筆が目立つ部分を挙げる。木曜冒頭の散歩に出かけた直後の場面である。

Evidently my news has not leaked out yet, for not a hundred yards from my house I saw a tiny kitten, about half my size, sunning herself at the top of

the area steps. For fun I pretended to make for her, expecting her either to fall down in a palsy or to run shrieking indoors. Instead of this, the impudent little baggage refused to budge an inch, but arched her back and actually spat at me. At that, after noting the address, I left the little fury with the words, “One day, my lady, you shall know whom you have insulted!” Not that I really minded, only I had to say something.(632頁右)

(見たところ、私のニュースはまだ外に漏れてないようだった、我が家から91メートルも行かない所に小猫がおり、私の半分くらいの大きさで、地下室への階段の最上段で日光浴しているのが見えた。面白半分に、彼女に跳びかかるふりをした、彼女は固まったまま倒れるか、悲鳴を上げて室内へ駆け込むだろうと思った。この生意気な小娘はその代わりに、2.5センチも動かず、背中をアーチ型に曲げ、実際、私に向かってうなり声を上げたのである。そのまま、住所を心に留めた後、私はちょっとした怒りを言葉にして残した「お嬢さん、いつの日か貴女が恥をかかせたのが誰なのか知ることになるだろう!」しかし本当に気にしている訳ではなく、何かを言わねばと思っただけである。)

跑到門口。看見我家的小貓正坐在階級上曝陽光。我便想上前去和他頑耍。

那知他不見我還可。一看見了我來。便連忙起立。四隻脚並在一起。把背心拱得高高的。豎着毛。圓睜着眼。嗚嗚的低叫。好似預備前敵也似的。我見了也就大怒。想把他衝倒了。我祇動得一步。他那如刀之爪已撲了我一下。我便再不敢前去。悻悻的走開。告訴他道：“貓夫人。你留心點。我是血獵。等我長大了之後。終有報仇的。”(8-9頁,コロンは補った)

(戸口まで走ると、我が家の小猫が階段に座って日光浴をしているのが見えた。私はそこに行って彼女と遊ぼうと思った。ところが、私に気付かないうちは平穩だったのに、私がかかるのを見るや、彼女は急いで起き上がった。四本足を一か所に揃え、背中をアーチ型に高々と曲げて、毛を逆立て、目を見開き、ウーッと低くうなり、まるで正面の敵に備えているかのようにだった。それを見て私も激怒し、彼女に体当たりしようと思って、一步だけ進んだ。彼女のナイフのような爪が少し当たったので、私はそれ以上進めず、立腹しつつその場を離れ、彼女に言った「猫の奥さん、覚えておけよ、私はブラッドハウンドだ。成長したら、この仇をとることになるぞ。」)

原作は、浮かれた Gibus がたまたま目に付いた小猫にちょっかいをかけた程度の話である。しかし、翻訳は、暴力的に脚色され、後味が大変悪くなっている。不必要的な加筆だと思う。

4

Landseer の複製が書齋に飾ってあり、家のものを壊されても厳しくは怒っていないようなので、Pretyman 夫妻は大変な動物好きで、かつ相当に裕福なようである。その中で暮らし始めた子供の犬を犬自身の視点から描き、成長したら大型犬になるという期待が膨らんですぐに打ち碎かれる様を温かく綴った物語である。翻訳については、家族の一員として室内で犬を飼う習慣が、当時の中国でどれほど浸透していたのか不明なので、もしかすると、犬のために小屋を建てたり、医者を呼んだりできるような英国貴族の物語として読んだ読者もいたのではなからうか。

なお、原作は、本誌前号の拙稿で論及した『From the Pit』の直後に掲載されている。一方、翻訳は、同じく論及した《騙術奇談 懺悔》の前に掲載されている。訳者も同じなので、原作の選択が安易なようにも見えるが、Strand 誌の作品の面白さに対する中国語訳者の信頼の高さがうかがえるように思う。 罍

【注】

1) 私の入手した本には出版年は未載であった。根拠は不明であるが、The British Library の検索結果は、出版年を1914年としている。

【参考文献・ホームページ(HP)】

陳玉堂編著《中国近現代人物名号大辞典》
浙江古籍出版社,1993年5月

郭浩帆「張毅漢 - 一位被遺忘の小説家」,
『清末小説』26, 清末小説研究会,
2003年12月1日

梁淑安主編《中国文学家大辞典 近代卷》
中華書局,1997年2月

Tate 管理 HP 「Tate」

<http://www.tate.org.uk/art/artists/sir-edwin-henry-landseer-323> (2013年7月9日確認)

「Death of Walter Emanuel」『The British Courier』1915年8月6日 (National Library of Australia 管理 HP 「Trove」 <http://trove.nla.gov.au/ndp/del/page/1586879> より)

William G. Contento 管理 HP 「The Fiction Mags Index」

<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2013年7月9日確認)

渡辺浩司「Bruno Lessing の中国語訳」,
『清末小説』35終刊,清末小説研究会,
2012年12月1日

渡辺浩司「L. J. Beeston の中国語訳」,
『清末小説から』110, 2013年7月1日

『明清小説研究』2013年第2期(総第108期)

2013発行月日記

論林紆情愛観対訳文的操縦 楼含松、林旭文
晚清広東題材小説の文学新変及文化反思

..... 葛永海、王丹

《晚清小説目録》匡補 郭 輝

論陸士諤《血淚黃花》中の革命叙事 ... 王 鳳仙

『吟辺燕語』批判の謎

沢本香子

英国莎士比著、林紆、魏易同訳『英国詩人吟辺燕語』(商務印書館1904。以下『吟辺燕語』と称す)がある。

ふたつの意味で有名だ。

ひとつは、シェイクスピア作品(の関係書)として広く読まれた。

「の関連書」とカッコでくくった。林訳には、シェイクスピア著と明記されている。だが、その中身はラム姉弟 Charles Lamb、Mary Lamb の『シェイクスピア物語 Tales from Shakespear』(1807)だ。林紆(琴南)らは、ラム名を示さずシェイクスピアだけを前面に押し出した。周知の事実だろう。

阿英は、どうしたことか自分の「晚清小説目」(1954)に「英蘭姆著」と書いている(124頁)。彼は自分の勝手な判断で、原書にはないラム名を記入したのだ。訂正したつもりか。あるいは、たんに勘違いしたにすぎないのか。そうだとすれば、うっかり書き間違うくらいに、ラム原作という事実が広く知られていたとわかる。

ふたつは、文学革命派から批判されて

さらに有名になった。

『吟辺燕語』は、文学革命を当時の社会に広く宣伝するきっかけに利用された記念碑的作品である。

林訳小説を批判することで、文学革命派は自分たちの敵が林紘であることを人々に知らしめた。のちの林紘批判の起点になった翻訳作品だ。

というわけで『吟辺燕語』は、中国では広く知られている。しかし、どこかしっかりとしない。研究者の側により大きな問題があるように思う。

結論からいう。1918年の文学革命派による『吟辺燕語』批判は、それそのものが成立しない。研究者で誰かこのことを指摘した人はいるのだろうか。私の知るかぎり、ひとりとしていない。中国の学界では、触れてはならない部類の事柄なのか。納得がいかない。

時代背景を簡単に説明しておく。

文学革命派の林訳小説批判

清朝末期において、林紘らが翻訳した外国の翻訳小説は、多くの読者から歓迎された。

林紘が採用した翻訳方法は、共同作業である。外国語を理解する人が原書を手にして口頭翻訳する。林紘はそれを聞きながら得意の文言で筆記する。主としてフランス語、および英語に堪能な協力者が、複数存在した。世界文学を大量に、しかも短期間に翻訳することができた理由だ。いわゆる「翻訳工房」である。このことばに負の意味は含まれない。出版元は、おもに商務印書館だ。

中華民国になっても商務印書館は、林訳小説を刊行しつづけている。商務印書館は、外国翻訳小説を集めた大型の「説部叢書」をもっていた。1914年全面的に再版したのは、日本金港堂との10年間にわたる合弁解消を記念する意味があった。そうすることによって「説部叢書」の出版を活発化し拡張させた。収録作品を増大させながら第4集第22編(1924)までを出す。奇しくも林紘の没年である。1集に収録するのは100種だ。単純に計算して全体で322種になる。そこから林訳小説だけを抜き出して「林訳小説叢書」全100種にまとめて出版した。それくらい読者の人気が高かった。商務印書館も売れると踏まなければその種の出版企画を通すはずがない。

清末において林訳小説は、知識人の目を海外に開いたものとして高い評価を得ていた。

中華民国が成立して数年が経過したところで、その事件は起こる。

文学革命運動は、陳独秀の主宰する『新青年』を舞台にして提起され展開していた。

胡適「文学改良芻議」は、該誌第2巻第5号(1917.1.1)に掲載される。彼が留学中のアメリカから投稿したものだ。同じく『新青年』に、陳独秀がつづいて「文学革命論」を発表する。

『新青年』を中心に、文学革命は大いに提唱喧伝された。主として、古文を廃し白話を使用せよ、という主張だ。ところが、社会的な反響がまったくおこらない。賛成だと支持を表明する人がい

ない。仲間内の議論だけがにぎやかだ。外部からの反論も公には提出されない。反対者が出てこない。存在しているはずの強大で圧倒的な力をもつ敵が、姿を現わさない。

文学革命派は、せっぱ詰まった。ついに敵対者を自分たちでつくることにした。そうする必要があったのだ。注目を集めるためであれば、なんでもやった。これを捏造、あるいはでっちあげという。

林訳小説のひとつ『吟辺燕語』が、文学革命派から攻撃目標にされる。林紘にしてみれば、突然の出来事だった。

結果として文学革命派によって無理矢理引きずりだされたのが、外国語を知らない翻訳者として著名な林紘である。

文学革命派は、自分たちが関係する印刷物に批判の文章を発表して林紘に有無をいわせない。一方的で強引なやりかただ。若い北京大学教授たちが複数で集団を形成し、市井にあって孤立無援の老人林紘ひとりをよってたかってつるしあげている。そういう図式になる。この事実を否定することはむつかしい。研究者の多くは見ないふりをする。

『新青年』を主宰していた陳独秀は、1918年当時、北京大学文科学長(今でいう学部長)である。『新青年』は、陳独秀が北京大学によられたのを機会に、編集部も上海から北京に移転している。

銭玄同(北京大学国文系教授)が、日本留学から帰国した王敬軒になりすまし、捏造論文を『新青年』第4巻第3号(1918.3.15)に投稿する。外部からの投稿という形だけを取りつくる。文中で、林紘

を当代の文豪だと特別に持ち上げる。例のひとつとして林訳シェイクスピア『吟辺燕語』を示した。身近には、別の林訳シェイクスピアが発表されていた。そちらを証拠として提出すれば、当面はより適切な例となっただろう。しかし、どういうわけか昔もむかし清末時期に刊行された『吟辺燕語』を選んだ。今から見れば、これがほころびのもとだ。

劉半農(北京大学法科預科教授)が、王敬軒(銭玄同)への反論を同時に掲載する。事前に打ち合わせていたとおり。ほめあげられた林紘について、劉半農は徹底した批判をくりひろげる。

劉半農は、林訳小説の欠点を数え上げた。

価値のない外国作品を多数翻訳した、誤りがあまりにも多すぎる、原文と訳文を比較対照すると削除書き換えが多くてでたらめだ、などなど。

その主眼は、なんとといっても『吟辺燕語』批判だ。

林紘はシェイクスピアの戯曲を小説に書きかえた。劉半農は、そう非難攻撃したのである。「豆と麦の区別もつかない[不辨菽麦]」と罵った。のちに鄭振鐸が使用したことばでいえば、林紘は小説と戯曲の区別がわからない[林先生大約不大明白小説と戯曲的分別的]。文学の基礎的知識もない、という意味だ。外国小説翻訳の権威である林紘をその座からひきずり降ろすのが目的だった。

いまいちど確認してほしい。劉半農が林訳『吟辺燕語』を批判した理由は、戯曲の小説化である。

戯曲の小説化をいうのであれば、同じく索士比亜 Shakspeare 著、訳者不記『瀕外奇譚』(上海・達文社1903)があった。ラムの小説化本が底本だと明記している。しかし、文学革命派は、無視した。なぜなら、林紘ではなかったからだ。

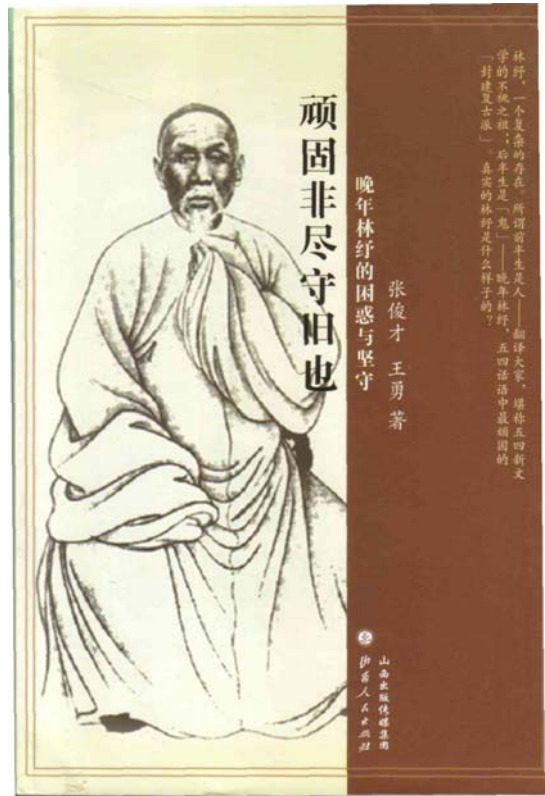
文学革命派は、特別に選んで林紘ひとりに目をつけた。自分たちの前に立ちただかる敵対者に仕立てあげた。打倒すべき守旧派(のちに封建復古派と称される)の代表者に指名した。劉半農が書いたのは、それを宣言した記念碑的一撃の論文にほかならない。

それ以後、林紘批判が大々的に開始される。さらに、実在しないものに尾ひれをつけて巨大化させていった。

王敬軒(銭玄同)の捏造論文と劉半農があらかじめ用意した反論だ。ふたりがなれあって演じたこの芝居(〔双簧戯〕。手紙だから〔双簧信〕)は、中国現代文学史上ではとりわけ知られた事件である。

中国といわず世界の学界では、林紘批判が基本的主流になっている。ゆえに、ふたりのなれあい芝居は、「勝者の文学史」である各種中国現代文学史において正の方向で肯定的に、積極的に記述紹介される。ここには文学革命派が犯した文学史上の大きな汚点であるという認識がない。

これについては例外がある。そのひとつは、張俊才、王勇著『頑固非尽守旧也：晩年林紘的困惑与堅守』(太原・山西出版传媒集团、山西人民出版社2012.1)だ。なれあい芝居に関しては、「學術道德に違反している〔有違學術道德的“双簧信”〕」と書



いている(229頁)。珍しい。

ただし、学界全体を見れば基本は今もかわらない。外国語を知らない翻訳者だとくりかえし林紘を嘲笑痛罵する。視点をずらす、つまり林紘からいえば、冤罪事件のはじまりになった。そう見る研究者は、ほとんどいない。

なれあい芝居のすぐあとに胡適が登場する。

胡適は、留学先のアメリカより帰国した。北京大学文科教授に就任したのは1917年9月のことだ。数えの二十七歳である。

王敬軒(銭玄同)と劉半農の文章が掲載された次の『新青年』第4巻第4号(1918.4.15)だ。胡適は「建設的文学革命論」を発表した。

現在の中国にある文学は「偽の文学〔假

文学]」と「死んだ文学[死文学]」だ。「真の文学[真文学]」と「生きた文学[活文学]」がそれらに取って代わる。30、50年以内に新中国の生きた文学を創造するという意気込みを示す。

該論文の主旨は、「国語的文学、文学的国語」という表現にまとめてある。つきつめると、死んだ文言を廃し生きた白話を採用しようという提案だ。

私が注目するのは、該論文の最後部分において胡適がつぎのように断言している部分だ(傍線省略)。

林琴南はシェイクスピアの戯曲を記述体の古文に翻訳した！これは本当にシェイクスピアにとっての大罪人である[林琴南把 Shakespear^ヲ的戯曲訳成了記叙体的古文！這真是 Shakespear^ヲ的大罪人]。306頁

シェイクスピアは普通 Shakespeare と綴る。胡適が書いて、なぜだか最後の「e」が抜けている。小さなことに見えるだろう(後述)。アメリカに留学し、しかも北京大学教授である胡適にしては、不注意ではないか。該文を『胡適文存』巻1(上海・亜東図書館1911.12 / 1935.6十七版、101頁)に収録したとき、シェイクスピアについてはもとの英文表示を削除した。「蕭士比亜」と漢字表記に書きあらためている。自分で誤りに気づいていたか。漢字に置き換えた理由は、やはり不明。

「！」をつけて強調している。戯曲を小説に書き換えて翻訳した。今でいう「小説化」ということばが理解しやすい。し

かも、林紓が筆述に用いるのは文言だ。小説化と文言使用が、胡適による林訳小説批判の根拠になる。劉半農が攻撃した林訳小説の削除改変についても胡適は視野にいれている。

胡適は、王敬軒(錢玄同)と劉半農のなれあい芝居から、その主張を継承した。あるいは、追認した、またお墨付きを与えた、といってもよい。アメリカ帰りで新進気鋭の北京大学教授が、そう断定したのだ。胡適は、林訳小説を批判する急先鋒のひとりになった。

だが、戯曲の小説化というこの部分について、胡適を含めて文学革命派は極めて危険な賭けに出た。別のことばでいえば、大失態を後世に残した。なにしろ私が現在そう指摘しているのだから。

その理由は、こうだ。

前述のとおり林紓と魏易が漢訳してシェイクスピア著と示した『吟辺燕語』の底本は、シェイクスピアの戯曲そのものではないからだ。ラム姉弟の『シェイクスピア物語』だった。ラム姉弟がシェイクスピアの戯曲を小説化した。だれでもが知っていることにすぎない。底本の散文を漢訳して散文になるのは、当然だ。小説化したという批判は、林紓にしてみれば濡れ衣にほかならない。

漢訳題名の「英国詩人吟辺燕語」は、分解するとつぎのようになる。「英国詩人」はシェイクスピアだ。「吟辺燕語」は戯劇物語を意味する。日本語訳すれば「シェイクスピア戯劇物語」である。

林訳『吟辺燕語』をめぐる劉半農が批判を展開し、胡適が追隨した。のちに鄭振

鐸が登場し、根拠とした『吟辺燕語』を知らぬ顔をして取り下げる。林訳シェイクスピアの別作品に差し替えて林紘批判を完成させた。林訳小説を批判して、戯劇を小説化したと止めをさしたつもりだ。

研究者のだれでもが、林紘らがシェイクスピアの戯曲を小説化したと認めている。疑問を提出したひと、異議をとらえた研究者は、ひとりもない。別の表現をすれば、事実にもとづいて林紘とその翻訳を支持し擁護した研究者は、いなかった。

この部分をながめるとき、私はいつも不可解な気分に襲われる。どうしても立ち止まってしまう。

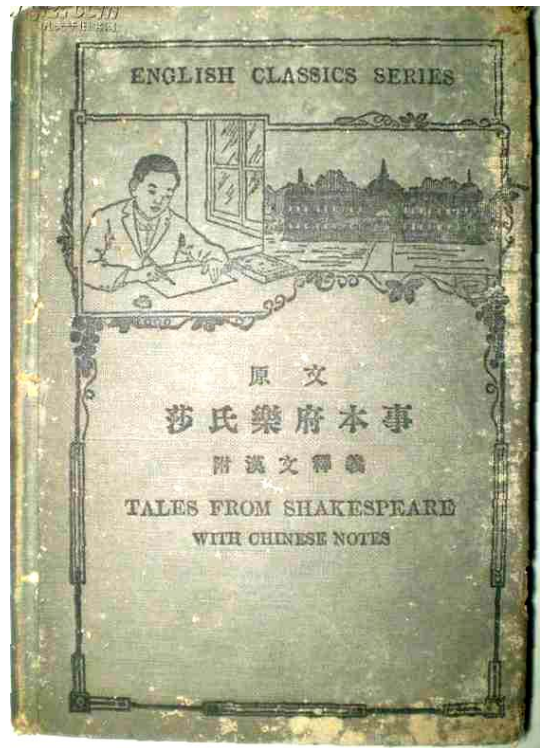
林訳『吟辺燕語』批判の謎

いうまでもなく、シェイクスピア自身が書いた「シェイクスピア戯曲物語」という作品があるわけがない。だからこそ、林紘らがシェイクスピア戯曲から20篇をえらびそれをもとに直接小説化して1冊の要約版にした。そう考えて劉半農は林紘を批判するわけだ。

しかし、イギリスには昔からラム姉弟の『シェイクスピア物語』(1807)があって有名ではないか。

中国では、ラム姉弟本の最初の漢訳は『吟辺燕語』ではない。その前に『瀕外奇譚』が刊行されていた。前述のとおりラム姉弟と説明してある。

さらに、『吟辺燕語』がラム姉弟の作品を漢訳したものだど大学生ですら、はるか以前にその事実を知っていた(『吳宓日記』1911年分)。



1910年には、ラム本の注釈本が商務印書館から刊行されている(傅光明による*1)。拉穆著、平湖甘永龍註釈『原文莎氏樂府本事附漢文釋義』(宣統二年五月/1923二十版)だというのだ。英語学習教材である。

商務印書館の出版目録『図書彙報』にその名前が見える。『莎氏樂府本事(附漢文釋義) Tales from Shakespeare with Chinese Notes』だ。その第118期(1927.4. 222頁)、第121期(1930.2.28止. 231頁)、新6号(1936. 3. 265頁)のいずれにも掲載される。息の長い刊行物に違いない。中国の孔夫子旧書網から表紙写真を引用しておく。頭に「原文」と表示されるのは傅光明の指摘通りだ。

その重版数を知れば、教育界ではラム本の存在は広く知られていたとわかる。

『吟辺燕語』はラム本だと指摘する論文が、その時すでに発表されている(東

潤(朱世溱)「莎氏楽府談」『太平洋』1917*2)。

以上を見ただけで、理解できる。中国の知識人、しかも外国文学に通じている人ならば、ラム姉弟『シェイクスピア物語』は一般教養、常識の範囲内であるだろう。北京大学の教授たちは例外だった、とでもいうのか。

林訳『吟辺燕語』批判には、王敬軒(錢玄同)、劉半農、胡適という高名な北京大学教授たちが参加している。また、『新青年』の編集には、魯迅(中華民国教育部部員)、周作人(北京大学文科教授、兼国史編纂処編輯員)兄弟もかかわっていた。

陳独秀、錢玄同、周兄弟たちは日本に留学したことがある。胡適はアメリカ留学組だ。劉半農はその時まで留学こそしてはいない。もとは上海に在住していた小説家、翻訳家だ。彼は英語ができた。ホームズ全集のうちの1冊(『福爾摩斯偵探案全集』第2冊、中華書局1916)を翻訳している。劉半農は、のちにイギリス、フランスへ留学し、フランスの博士号を取得する。このことは、本稿とは直接の関係はない。しかし、劉半農はもともと外国語について高い能力を持っていたといいたいのだ。

北京大学を中心に集まった文学革命派は、同時に雑誌『新青年』派でもあった。当時、高度の学識を有する知識人集団のひとつであるといつて過言ではない。

そのなかの誰ひとりとしてラム姉弟の『シェイクスピア物語』を知らなかったのか。とても信じることができない。

胡適がシェイクスピアの英文綴りを「Shakespear⁷⁷」とし「e」を抜いていたこと

を指摘した。実は、そう綴る著書が実在する。ラム姉弟の“Tales from Shakespear⁷⁷”にほかならない。胡適はラム姉弟本を知っていたことになる。

魯迅とシェイクスピア

日本留学中の魯迅は、林訳小説が刊行されるたびに購入した。大いに好んでいた、と周作人は証言している。後年の魯迅による林訳批判からはかけ離れている。

魯迅、特に林訳『吟辺燕語』批判前の彼について、シェイクスピアとの関係を探索するのは容易ではない。

ふたつに分ける。

魯迅はシェイクスピアを知っていたか。つぎ。魯迅はシェイクスピア作品を読んでいたか。

若い魯迅が筆名を使用した文章で、シェイクスピアに触れるのは次の3カ所だ。

1 令飛「摩羅詩力説」1908。狹斯丕爾(Shakespeare)の名前をだす*3。

2 令飛「科学史教篇」1908。狹斯丕爾(Shakespeare)の名前をだす*4。

3 迅行「文化偏至論」1908。「ジュリアス・シーザー」の一部分に言及する。ブルータス(布魯多)がシーザー(該撒)を暗殺し(ローマ)市民に説明演説をする。理路整然と大義名分を説く。しかし、アントニー(安多尼)が血にそまった(シーザーの)衣服を指していった数語にはおよびなかった。第3幕第2場の内容を紹介する*5。

12で魯迅が示す「狹斯丕爾」は、林訳の用いた「莎士比」とは一致しない。

魯迅がよったのは、巖復『天演論』「導

言十六進微」に見える「狹斯丕爾」だ*6。

魯迅は、そのころ『天演論』に心酔していた。嚴復経由でシェイクスピア名を吸収したようだ。

3のシェイクスピア「ジュリアス・シーザー」は、1908年当時まだ漢訳されてはいない。

魯迅は、シーザーに漢字の「該撒」を当てている。

沙士比阿著、坪内逍遙訳『自由太刀しゅうのたち余波鋭鋒：該撒奇談』(東洋館書店1884.5*7、なごりのきれあじ 国立国会図書館近代デジタルライブラリー)に通じるか。ただし、坪内訳本の序は「塞撒奇談序」と記す。シーザーならば、当てる漢字が異なっても意に介さない。

坪内が訳した人名を見ておく。ぶるたす(舞婁多須)、しいざる(獅威差)、あんとにい(菴兔尼)などだ。これまた魯迅が用いた漢字とは別物だ。

確定することはむづかしい。だが、魯迅のシェイクスピア作品理解は、日本語経由であったとしても不思議ではないだろう。

日本では、坪内逍遙の日訳シェイクスピアは原文からのものだ。同時に、ラム本からの翻訳も別に多く刊行されていた。それが当たり前の状況であったことをいっておく。魯迅はそういう環境のもとに留学生であった。

ついでに触れる。林紓らがクイラー＝クーチ本を底本にして「凱徹遺事」と題して漢訳した。「凱徹」であって「該撒」ではない。のちの1916年になる。1908年ころの魯迅とは、関係がない。

高旭東『魯迅と英国文学』(西安・陝西人

民教育出版社1966.9 魯迅研究書系)がある。

該書「第3章 魯迅与莎士比亚、蕭伯納及其他」の「一、魯迅与莎士比亚」において林訳『吟辺燕語』に言及する(120-121頁)。高旭東は、林訳シェイクスピアによって魯迅はシェイクスピアを早くに了解したという。だが、その根拠を提出することには成功していない。

若い魯迅が、1904年に刊行された『吟辺燕語』を読んでいたら可能性は、ないわけではない。では、魯迅がラム姉弟を知っていた証拠はあるのか。文献の上では、直接確認することができない。ただし、ラム姉弟本が、当時の知識人が有する常識の範囲内であれば、わざわざ書くことでもない。言及がないのも当然ということになるだろう。

文学革命派のたくらみ

林訳の単行本には、たしかにラム姉弟の名前は明記されてはいない。しかし、シェイクスピアの小説化本といえ、ラム姉弟の著作が従来から著名なのだ。林紓批判を行なった北京大学教授たちのうちひとりも、その事実に気づかなかった。そう考えるのは、やはり無理である。胡適の例がある。彼を除いたほかの人々が知らないことを証明するのは、ほとんど不可能だ。

そうすると結論は、ひとつしか残らない。

北京大学の文学革命派は、『吟辺燕語』がラム姉弟の『シェイクスピア物語』だと知っていた。百も承知のうえで、該書にラム姉弟の名前がないという事実をつ

かまえた。これを根拠に、知らないふりをした。その目的は、シェイクスピアの戯曲を林紓たちが勝手に小説化した、と非難痛罵するためだ。林紓批判を発動し展開するために、虚偽の証拠を積極的に提出した。

こういう行為を指して社会一般では、「濡れ衣をきせる」という。あるいは、無実の罪を押しつける、罪もないのに陥れる。林紓は、身におぼえのない罪を受けた。普通に考えて、林紓冤罪事件である。

王敬軒(銭玄同)と劉半農のなれあい芝居を起点にして、つまり『吟辺燕語』から林紓冤罪事件がはじまった。それほど重要な『吟辺燕語』だ。なんどでも書くが、虚偽にもとづいて林紓小説を批判した証拠のひとつなのだ。

ところが、ここに注目する研究者は、いない。1918年当時も、また現在にいたるまで誰も指摘しない。不思議なことだと思ふ。

張俊才の注目すべき新著

先に触れた張俊才、王勇著『頑固非保守旧也：晩年林紓的困惑与堅守』をもう一度とりあげる。

参考までにその目次を紹介しよう。

- 引 言 晩年林紓：一個複雑的存在、
第1章 “五四”林紓的“滑鉄盧”、
第2章 晩年林紓的政治絶望、
第3章 晩年林紓的文化憂思、
第4章 晩年林紓的文学焦慮、
第5章 重評五四新旧思潮之争、

結 語 晩年林紓：一個文化保守主義者、

参考文献、
後 記

その内容は、書名の副題に示されている。晩年の林紓を対象にして論じる。その政治思想、文化的立場、文学主張などである。

目的は、文学革命派の林紓に対する扱いを再検討することだ。

晩年の林紓にしてみれば、突然の批判を受けたのだから「困惑する」はずだ。しかし、それに屈することはなかった。自己の考えは「堅く守った」。

再検討の結果は、こうだ。

文学革命派が林紓に対して不公正な評価を下したことを明らかにした。章題に「五四新文化派の欠点を正視しなければならぬ」(226頁)があることを示すだけで、著者の姿勢を理解することができる。従来の研究評論は、かたよったものだ。この主張が、該書を特色あるものになっている。

文学革命派による根拠のない林紓攻撃が行なわれた。事実を押さえながらそう論証していく。林紓の立場によりそった記述は、実証的だ。今までには見るのできなかった種類の研究書になっている。従来からある否定的な評価を全面的にひっくりかえした。

張俊才の該当研究は、「国家社科基金」による研究成果だと明らかにしている(267頁)。従来からの主流である林紓批判を否定する研究なのだ。中国においてよ

く許可が出たものだ、と私は驚く。原稿を提出して出版審査も通過した。審査員が賞賛したことを張俊才自身でさえ予想していなかったようだ(268頁)。

晩年の林紘を研究した注目されるべき著作のひとつだと私は高く評価する。

冤罪を数えあげるのであれば、上に見てきた『吟辺燕語』が最適の実例だといえることができる。なにしろ林紘冤罪事件となる最初の事例なのだ。

ふたたび、簡単にまとめよう。

林紘らは、ラム姉弟の小説化シェイクスピアを翻訳した。ところが、劉半農、胡適らは、シェイクスピアの戯曲を勝手に小説化したと非難嘲笑する。文学革命派による誤爆も誤爆、大がつく。

張俊才は、この重大事実について、どういう説明をしているだろうか。

なにしろ張俊才は、林紘研究の専門家のなかでも第一人者として名高い。彼は、晩年の林紘が冤罪だと証拠を示して主張している。従来とは反対の評価を下した。では、『吟辺燕語』についても今までとは異なる説明があってもいい。今の私がいかに興味は、そこにある。

張俊才の説明

私の見るところ、張俊才が書名をだして『吟辺燕語』に言及する箇所は5カ所、書名をださないで触れるのは2カ所ある。

1 王敬軒(錢玄同)が『吟辺燕語』をほめあげる箇所を引用する(28頁)。

2 劉半農がそれに反論して「豆と麦の区別もつかない」と罵った箇所を引用する(29頁)。

3 「1904年、林紘は英国ラム姉弟著『シェイクスピア物語[莎士比亞戲劇故事集]』(林訳では題名を『英国詩人吟辺燕語』とする)を翻訳した」と述べる(139頁)。

4 「英国詩人吟辺燕語・序」から引用する(176頁)。

5 同上(185頁)。

6 劉半農が林紘を批判して「豆と麦の区別もつかない」と書いた(219頁)。書名は出さない。

7 上と同様(234頁)。書名は出さない。書き抜きながら私の身体から力が抜け出ていく。

林紘冤罪事件の最初にして基本となった『吟辺燕語』なのだ。張俊才は、この重要事件を横目で見ながら、かたわらを通じたにすぎない。表面的な事実を述べるだけ。正視しないのだ。事件のもつ意味が理解できないのだろうか。

これには正直のところ、落胆した。

実は、別の林訳シェイクスピアについても冤罪事件があった。

鄭振鐸が、林紘批判を行なっている。

彼があげた作品は、以下のとおり。

「雷差得紀(リチャード2世)」「亨利第四紀(ヘンリー4世)」「凱徹遺事(ジュリアス・シーザー)」(1916年の『小説月報』に掲載)、さらに単行本の『亨利第六遺事(ヘンリー6世)』(商務印書館1916)などを根拠にする。林紘は戯曲と小説の区別もつかないと罵った。彼は以前の『吟辺燕語』では証拠にならないことを知っていたのだ。わかっていたから、なにもいわず林訳小説のこれら別作品に入れ替えた。巧妙である。

こちらの底本がクイラー=クーチ本で

あったことも、林紘冤罪事件を決定づける事実である。だが、クイラー＝クーチ本について張俊才の言及は、ない。

林訳イプセン『梅孽(幽霊)』(1921)にも、すでに小説化した底本があった、デル本である。張俊才は、デル本も無視する。

鄭振鐸が林訳小説を批判するためにかかげた上記の証拠は、機能していない。虚偽だからだ。研究者たちが知らなかっただけ。根拠が全滅であるからには、鄭振鐸による林紘批判は冤罪にほかならない。

該書「参考文献」262頁に樽本の『林紘冤罪事件簿』(2008)、『林紘研究論集』(2009)が掲げてある。だが、ただの飾りにすぎないとわかる。

林訳シェイクスピア、林訳イプセンは、林紘の名誉を挽回するための重要かつ明確な証拠のひとつだ。張俊才には、その認識がないらしい。もしも言及があれば、張俊才の著作は人々を納得させるさらに強力な説得力を獲得したはずだ。残念なことだった。

林紘研究の第一人者張俊才ですらそうなのだ。ほかの専門書に期待しろというのは、無理な話だろう。 罍

【注】

- 1) 傅光明「(台湾商務印書館《莎士比亞戲劇故事》) 訳後記」查爾斯・蘭姆 (CHARLES LAMB)、瑪麗・蘭姆 (MARY LAMB) 著、傅光明訳『莎士比亞戲劇故事集』台湾商務印書館2013.4。ウェブ上では「与莎士比亞“故事”終生相伴 台湾商務印書館《莎士比亞戲劇故事》訳後記」として2013.4.7付電字版
- 2) 詳しくは次を参照。樽本「阿英によ

る林紘冤罪事件 『吟辺燕語』序をめぐって』『清末小説』第31号2008.12.1、5-35頁

- 3) 令飛「摩羅詩力説」『河南』第2期、第3期1908.2.1、3.5初出未見 / 『魯迅全集』第1巻「墳」所収。北京・人民文学出版社1981。64頁
- 4) 令飛「科学史教篇」『河南』第5期1908.6.5初出未見 / 『魯迅全集』第1巻「墳」所収。北京・人民文学出版社1981。35頁
- 5) 迅行「文化偏至論」『河南』第7期1908.8.5初出未見 / 『魯迅全集』第1巻「墳」所収。北京・人民文学出版社1981。52頁
- 6) 侯官嚴幾道先生述『赫胥黎天演論』富文書局石印、光緒辛丑(1901)仲春。二44才 / (英) 赫胥黎著、嚴復訳『天演論』北京・商務印書館1981.10 嚴訳名著叢刊。39頁
- 7) 柳田泉『明治初期翻譯文学の研究』明治文学研究第5巻 春秋社1961.9.15 / 1966.3.10二刷。47頁。「同十年[明治十六年]五月」は「同十七年五月」の間違いであると思う」とわざわざ説明している。だが、国立国会図書館近代デジタルライブラリー公開本には「同拾七年」とある。表紙は「沙比阿翁原撰」。

清末小説から

段 懷清 胡適文学改良主張中三個尚待澄清の問題
『浙江大学学报(人文社会科学版)』2007年
第3期(第37卷第3期)2007.5.10

- 謝 天振 『訳介学導論』北京大学出版社2007.10
21世紀比較文学系列教材
- 郭 延礼 都徳《最後一課》の首訳、偽訳及其全訳文
本 『中華読書報』2008.4.16 電字版
- 張 静 胡適の旧白話小説について 啓蒙小説
「真如島」を中心に 『愛知県立大学大学院
国際文化研究科論集』第10号 2009.3.3 電
字版
- 姚 玳玫 『文化演繹中的図像：中国近現代文学 / 美
術個案解讀』広州・広東人民出版社2010.8
- 王 昕 清末民初哈葛徳小説漢訳考述 『湖北大学
成人教育学院学報』第29卷第5期 2011.10
- 趙 亜宏 從胡適の早期翻譯小説看其文学翻譯觀
以《柏林之困》与《最後一課》為例 『名作
欣賞』2011年第29期 2011.10.1
- 中里見敬 林訳『巴黎茶花女遺事』の語りと文体
(上)：「風景」/「内面」の発見と語りの
形式 『東北大学中国語学文学論集』第16号
2011.11.30 電字版
林訳『巴黎茶花女遺事』の語りと文体
(下)：作中人物の話法の形式 『東北大学
中国語学文学論集』第17号 2012
日本と中国における「椿姫」の翻譯 同
時代東アジアの文脈から見た林訳小説 『九
州中国学会報』第51巻 2013.5.11
- 子安加余子 周作人とA.ラング 童話への理解
斎藤道彦編著『中国への多角的アプローチ』
中央大学出版部2012.1.13 中央大学政策文
化総合研究所研究叢書13
- 高玉、朱利民 『兩浙啓蒙思潮与中国近現代文学』北
京・中国社会科学出版社2012.3 兩浙文学与
文化研究書系
- 顔 廷亮 『黄世仲革命生涯和小説生涯考論』上下
北京・人民出版社2012.4
- 張 治 『中西因縁：近現代文学視野中的西方「經
典」』上海社会科学院出版社2012.8
- 劉 錚 【書評】林琴南の功臣(張治『中西因縁』)
『東方早報』2012.11.25 電字版
- 李 建梅 『文学翻譯規範の現代変遷 從《小説月
報》(1921-1931)論商務印書館翻譯文学』成
都・四川出版集团、四川辞書出版社2012.8
- 陳 宏淑 《愛的教育》前一章：從Cuore到《馨兒就
学記》の転訳史 『翻訳史研究』2012 上
海・復旦大学出版有限公司2012.10
- MICHAEL GIBBS HILL *LIN SHU, INC. Translation
and the Making of Modern Chinese Culture*
OXFORD UNIVERSITY PRESS 2013
- 凌 碩為 『新聞伝播与近代小説之転型』杭州・浙江
大学出版社2013.1
- 習 斌 『晚清稀見小説鑑蔵録』上海世紀出版股份
有限公司遠東出版社2013.1
- 編 者 (『中国偵探小説理論資料(1902-2011)』)
前言 任翔、高媛主編『中国偵探小説理論資
料(1902-2011)』北京師範大学出版社2013.3
- 范 伯群 『填平雅俗鴻溝 范伯群學術論著自選
集』南京・鳳凰出版伝媒股份有限公司、江蘇
教育出版社2013.4
- 傅 光明 (台湾商務印書館《莎士比亞戲劇故事》)
訳後記 查爾斯・蘭姆 (CHARLES LAMB)、瑪
麗・蘭姆 (MARY LAMB) 著、傅光明訳『莎士
比亞戲劇故事集』台湾商務印書館2013.4 (ウ
ェブ上では「与莎士比亞“故事”終生相伴
台湾商務印書館《莎士比亞戲劇故事》訳後
記」として2013.4.7付電字版)
- 国 蕊 陳冷血の翻譯小説における一人称の試み
『九州中国学会報』第51巻 2013.5.11
- 徐 少知 (老残遊記新注) 出版前言 『老残遊記新
注』台湾・里仁書局2013.5.31
- 内田慶市 翻譯という異文化交渉 『産経新聞』2013.
6.24夕刊
- 松田郁子 吳趸人のピカレスク 『中国文芸研究会
報』第380号 2013.6.30
- 左 鵬軍 近代文学研究中的新文学立場及其影響之省
思 『文学遺産』2013年第4期 2013.7.15
- 范伯群、黄誠 報人雜感：引領平頭百姓的輿論導向
以《新聞報》嚴独鶴和《申報》周瘦鵑的雜
感為中心 『中国現代文学研究叢刊』2013年
第8期(總第169期)2013.8.15
- 『中国現代文学研究叢刊』2013年第5期(總第166期)
2013.5.15
- 近現代文学翻譯史上通俗作家群 ……禹 玲
以“女小説家”為職業 清末民初小説場域性別秩序
的松動 ……馬 勤勤
論林紓小説中的辛亥革命叙事 ……王 鳳仙
胡適翻譯小説底本及与其《紅樓夢》研究之關係考
……張 惠

■次号公開は2014.1.1予定■